

## <講演抄録>6. 下顎枝矢状分割法(SSRO)適応後の長期顎態変化について(第14回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	上岡 義章, 菅原 準二, 大森 勇市郎, 川村 仁, 三谷 英夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	8
号	1
ページ	79-79
発行年	1989-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31324">http://hdl.handle.net/10097/31324</a>

変換を行い、その係数を標準化し多変量解析（クラスター分析，主成分分析）を行った。

#### [結果]

下顎頭後面形態はクラスター分析によって A, B, C の3つのタイプに分けることが出来た。各群は主に第1主成分軸上において分類されており，第2主成分の関与する程度は少ないと考えられた。なお，第1主成分は下顎頭長軸の傾斜，下顎頭後面における X 軸の位置を表しているものと考えられた。各分類群の形態的特徴は以下のとおりであった。

A 群(69 例)・下顎頭長軸がやや内方に傾斜し，X 軸が下顎頭のほぼ中央に位置するタイプ

B 群(18 例)・長軸が A 群より内上方に傾斜し X 軸が下顎頭の上方に位置するタイプ

C 群(17 例)・長軸が A 群より内下方に傾斜し，X 軸が下顎頭の下方に位置するタイプ

### 6. 下顎枝矢状分割法(SSRO)適応後の長期顎態変化について

上岡義章，菅原準二，大森勇市郎，川村 仁\*，三谷英夫（歯科矯正），（\*口腔外科 1）

#### [目的]

本研究は，下顎枝矢状分割法(SSRO)適応後の顎態の変化様相，特に下顎骨の長期的な適応様相について検討することを目的とした。

#### [資料および方法]

研究資料としては，下顎枝矢状分割法を適用後 6 年以上経過した骨格型下顎前突症 9 例（男性 2 名，女性 7 名）の側面頭部 X 線規格写真を用いた。撮影時期は，各症例とも術前矯正開始時，手術直前時，動的治療終了時，終了後 2 ないし 3 年時，最終資料採得時の計 5 回であった。それぞれの透写図上で骨格系と歯系に関する計測を行い，各期間の変化量をもとに顎態の平均的变化様相を検討した。

#### [結果]

1. SSRO 適用後の下顎骨の長期的変化は，下顎骨の後退量のいかにかわらず小さく，顎関係も安定していた。

2. 上下顎切歯軸は，保定および観察期間を通じて多少の変動を示すものの，長期的には安定化する傾向を示していた。

本研究の結果から，手術によって後退した下顎骨は，再構成された咬合関係のもとで，口腔周囲組織と速やかに適応し，長期的にも安定した状態を保持している

ことが明らかになった。従って，SSRO は，骨格型下顎前突症の治療にとってきわめて有効な治療手段であることが確認できた。

### 7. 当科における良性潰瘍 第2報 小唾液腺に発生した多形性腺腫について

原 敬，嶋原 隆，松田耕策，飯塚芳夫，山口 泰，越後成志，手島貞一（口腔外科 2）

昭和 54 年 4 月より昭和 63 年 10 月までの約 9 年間に当科を受診し，病理組織学的に多形性腺腫と診断された 28 例のうち，小唾液腺に発生した 20 例について，臨床的，組織学的に検討を加え報告した。

1) 発生部位は，口蓋に 16 例と多く，口唇 2 例，頬粘膜，歯槽粘膜は各 1 例であった。2) 性別では，男性 8 例，女性 12 例と女性に多く，年齢では，20 歳から 76 歳までで 40 歳以降に多かった。3) 初診時の主訴は，無痛性の腫脹・腫瘤が 17 例と多く，疼痛の 2 例は二次的なものであった。4) 腫瘍の大きさは，長径で 4 ミリから 45 ミリの範囲で，10 ミリ以上 40 ミリ以下の症例が多かった。5) 処置は，摘出 13 例，切除 7 例で，部位別には，硬口蓋の 6 例が切除，その他は，1 例を除いて摘出であった。6) 摘出物の被膜は，肉眼的には全例に認められたが，組織学的には，10 例が不完全であった。7) 組織型は，成分比率により分類したところ，上皮成分優勢型が 16 例と最も多かった。8) 予後は，頬部に発生した 1 例を除いて再発は認められなかった。

この再発例の要因として，1) 不完全な外科処置 2) 発生部位 3) 組織学的被膜の欠如 4) 組織型（粘液腫様成分優勢型）5) 特異組織像（細胞異形，核分裂像）などが考えられた。

頬部のような軟組織中に発生した本腫瘍の再発を防止するためには，注意深い外科的処置が必要であることは言うまでもなく，初診時の腫瘍の硬さ，可動性などについて十分な診査が必要と思われた。

### 8. 当科における良性腫瘍 第3報 血管腫について

木村 篤，松田耕策，原 敬，佐々木優，磯清 純，佐藤 敦，飯野光喜，安田隆行，嶋原 隆，斉藤哲夫，下田 元，五十嵐隆，普天間朝義，猪狩俊郎，飯塚芳夫，山口 泰，越後成志，手島貞一（口腔外科 2）

昭和 54 年 4 月当科開設以来，9 年 6 か月間に当科を受診し，病理組織学的に血管腫と診断された 43 例，46 腫瘍について臨床的病理組織学的検討を行なった。1)